

秋田大学HIV予防啓発イベント [LOVE & SAFETY]

—臨床心理学的地域活動の実践例—

高田知恵子 秋田大学教育文化学部

要約

大学院生の自発的な企画でHIV予防イベント（以下イベントと表記）を大学祭に合わせて開催した。このイベントを臨床心理学的地域活動として、また院生のトレーニングとして、その意義について、本イベントに関する記述、コメント資料等から検討した。イベント内容は、クイズラリー、HIVに関するポスター展示、トークショー、DVD上映、レッドリボン制作であった。トークショーは秋田県の第一線で活動している医師、県エイズ担当者、保健師、カウンセラーが若者向けの話をした。イベントを通して、資源開発、協働、現実的作業、楽しく活動することなどの重要性が指摘された。初めての試みであったことから、トークショーのあり方、来場者への勧誘法、イベントを継続させることなど今後への改善点があげられた。全体に見ると来場者の反応、外部からの評価、院生らスタッフの自己評価から、イベントの成果、トレーニングとしての成果はあったと考えられた。HIV予防啓発活動がHIV陽性者支援、HIV予防につながると示唆された。

キーワード：臨床心理学的地域活動、HIV予防啓発、臨床心理実習

I はじめに

HIV陽性者ケアとHIV予防はHIV対策の両輪である（高田 2006）。この二つはHIVカウンセラーの業務でもあり、HIV陽性者等へのカウンセリング、医療スタッフ等へのコンサルテーション、地域への啓発を行うことは重要な役割である（矢永ら 2009）。HIV予防に関しては、性活動の活発になる若者に訴えることが重要である。大学祭におけるHIV予防啓発イベントは、大学生に対して、また地域に開かれた形で行なうので、一般市民に対しても啓発ができる格好の機会と言えるであろう。また若者による活動は同年代の若者に対して大いにアピールすることができる（ユースプログラム実行委員 2007）。若者の視点で若者に陽性者ケアとHIV予防のアプローチをすることは大きな効果を生むであろう。

II 問題と目的

今回臨床心理士を目指す大学院生が自発的にHIV予防啓発についてのイベントを企画・実施した。筆者はHIVカウンセリングの活動と研究を行っており、授業等でHIVカウンセリングについ

て語る機会は多く、院生もそれに興味を持ってくれた。今回のイベントに際して、筆者はイベント内容や対外的な交渉等の指導を行ないながら共に活動した。

ところで臨床心理士養成大学院での実習としては、臨床心理相談室での相談、病院等での実習はあるが、地域援助活動、特に啓発活動の実習機会は多くはない。幅広い活動をこなせる臨床心理士を養成するために、このイベントは啓発活動の実習訓練としても格好の機会であろう。さらに、狭い意味での心理臨床だけではなく現実的な企画・運営、対外的な交渉を体験する機会にもなる。実際、院生たちの取り組み、その後の様子を見ても、このイベントを通して得たもの、それらが彼らの成長に寄与したところは大きいと思われた。その過程を検討することは院生指導の上でも有益な示唆が得られるものと考えられる。

院生が初めて取り組んだイベントは手探りの部分も多々あったが、HIV予防啓発についてそれなりの成果をあげる事ができたと言えよう。本稿ではその企画、準備、実施、報告・ふりかえりの経過を記述し、各段階について検討することで、今回のイベントを臨床心理学的地域活動の一例として、①HIV予防

啓発、②院生の実習トレーニングとしての意義を考えていきたい。それが、このような院生主導の活動や今後の啓発活動のあり方についての指針やマニュアル作成にもつながると考えられる。

Ⅲ 方法

1. 対象：HIV 予防啓発イベント

[LOVE & SAFETY]

日時：2008年10月19日(日) 10:00~16:00

場所：秋田大学3号館 146教室・150教室

2. 手続き：HIV 予防イベントの企画段階から当日の動き、また事後の振り返りにいたるまでの活動経過を記述し、検討した。また、トークショーに出演して下さった講師によるコメント、来場者のアンケート結果、企画した代表院生2名のふりかえり、院生らの反省会をまとめた文章なども検討した。

Ⅳ 活動経過

1. 企画

修士課程2年次院生2名が中心となり、イベントを企画した。イベントの目的は、大学祭の機会を活かして、若者や一般市民に対して、HIV 予防、HIV 陽性者への理解支援を促進することである。イベントの企画にあたっては指導教員が若者向け啓発活動について情報を提供した。これら院生は前年エイズデーに学生ホールでHIV 予防の展示パンフレットの配布を行なった経験があった。うち院生一人は東京都の若者向けHIV 予防啓発拠点「HIV/AIDS 情報ラウンジふぉー・てい」(注1)を見学して、担当者から情報を得て準備にあたった。この2名の代表院生が企画書を作成し、その企画の趣旨に則ってポスター、パンフレット、予算書を作成した。

2. 準備

1) PR 活動：イベントのポスターは院生がデザインした(図1)。院生が手分けして秋田市内の9高校、大学近辺の公共施設、店舗等を訪問しポスター掲示やチラシ配布をお願いした。秋田大学新聞の取材に応じてイベント開催を紹介してもらった。学内の教員へも招待状を出した。

2) 資料準備：パンフレット、冊子、啓発グッズはエイズ予防財団、秋田県、啓発用のコンドームは民間企業から調達し、エイズ予防パネル等は保健所から、避妊具教材セットは秋田大学保健学科から借用した。さらに院生がパネルを作製した。また手作

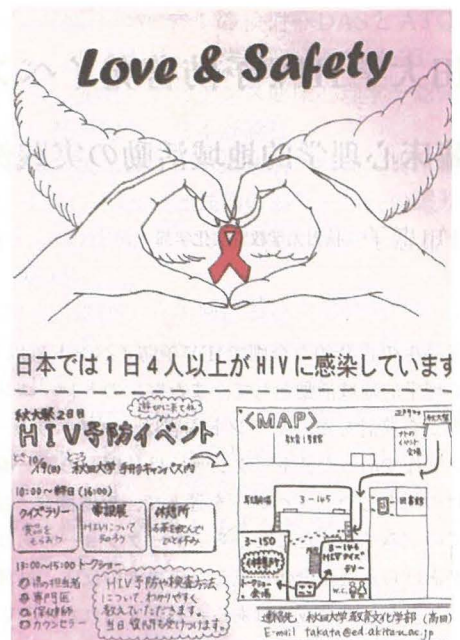


図1 ポスター(デザイン：修士1年 佐藤舞子)

りコーナーのため、メッセージカード、レッドリボンを用意した。参加者へのおみやげとして、パンフレットとお菓子を入れる紙袋を用意した。

3) 会場準備：会場設営の準備は前日遅くまで、院生全員がパネルの搬入、展示ポスターの貼り付け、飾りつけ等を行った。実際に展示してみて、当初の予想と異なる点については修正し、効果的に見えるような工夫を行った。会場は2教室を使用した。大きい教室をトークショー会場と休憩所、クイズラリーの終点、景品引換所とした。小さい教室には、HIV・エイズの解説ポスターや器具などの展示、レッドリボン制作コーナー、クイズラリーの出発点を設けた。2会場をつなぐための導線として床に足跡のイラストを貼りつけた。

3. イベント・プログラム内容

1) イベントの内容

イベントの内容は表1の通りである。

常設展では「HIVについて知ろう」というタイトルで、HIVについての基礎知識を書いた展示ポスターや、避妊のためのツール、コンドームなどのHIV 予防グッズ、各国の各種レッドリボン、HIV 関連書籍、パンフレット等を展示した。

2) ポスター展示とクイズラリー

来場者に最低限知ってもらいたい基礎知識とし

表1 プログラム

- ・常設展：「HIVについて知ろう」ポスター展示、パンフレット配布
- ・クイズラリー：HIVのクイズに答えて賞品をもらおう
- ・トークショー：「若者へのメッセージ」お話しと質疑
13:00-15:00 エイズ診療医師、県エイズ担当者、保健所保健師、HIVカウンセラーによるお話
- ・休憩所：お茶を飲んでひと休み
- ・ビデオ上映：DVD紙芝居「ミズホトサトシ」
- ・制作コーナー：レッドリボンを作ろう、メッセージを書こう

で、「HIVとエイズ」、「HIVの感染経路」、「HIV陽性者との接し方：日常生活では感染しない」、「HIVの潜伏期間」、「HIV感染予防法」、「保健所で無料・匿名のHIV検査」、「セクシュアリティ」、「エイズ患者への福祉制度」、「HIV・エイズの歴史」等のポスターを展示した。

クイズラリーでは、来場者に回答用紙と鉛筆を渡して、HIVに関するクイズに回答して貰った。クイズは「HIVとエイズは同じものである。(×)」、「HIV感染者と握手したり、一緒に食事してもHIVに感染することはない。(○)」などの基礎的なもので、クイズの横に展示してある展示ポスターを読めば解答できる仕組みにした。クイズに回答していくと展示会場のポスターを順次読むことになるので、基本知識が学習できる。来場者は親子で、また友達同士で楽しんでた。クイズ全問に答えてくれた参加者にはおみやげの景品を渡した。

3) トークショー「若者へのメッセージ」

各講師の話の要旨は以下のとおりである。

(1) 大館市立総合病院高橋義博氏「エイズ：世界・日本・秋田—医師から若者へ」：秋田県で長年HIV陽性者の治療にあたってきた立場から、HIV・エイズの特徴、治療、検査について、また秋田県、東北での状況について分かりやすく説明して下さった。さらに若者へのメッセージとして「信頼できる相手が見つかるまでノーセックス」「救命具として携帯するコンドーム」などのセーフセックス5カ条を示して下さった。

(2) 秋田県健康推進課滝本法明氏「秋田県のエイズ—現状・対策について」：県民の健康を守る行政の立場から、秋田県のHIV予防対策の4本柱「啓発・教育（予防）」「検査・相談（早期発見）」「医療体制

整備（早期治療）」「実態調査」を提示し、さらに私たちにできることとして「HIVについて正しい知識を持つ」[HIVに感染しないようにする]「HIV感染者、エイズ患者を差別しない」「自分の周りに感染者、患者がいたら手をさしのべられる人になる」ことを提案して下さった。

(3) 横手保健所熊澤まみ氏「保健所のエイズ検査について」：県民に直接接する保健師の立場から、HIV抗体検査相談の受け方、検査前の説明、陽性となった場合の対応、不安への対応などを、写真を提示しながらわかりやすく説明していただいた。

(4) 秋田大学高田知恵子「HIVに感染するということ—HIV陽性者の現状」：HIVカウンセラーの立場から、HIV感染による心理的影響と、心身のストレスをカウンセリングにより乗り越えていく陽性者の成長を伝えた。本人告知、セクシュアリティなどHIVに特徴的なテーマもあるが、カウンセリングの基本は他の領域と変わらないことなど伝えた。

4) 休憩所・制作コーナー・DVD上映

大学祭を歩いて疲れた人が休めるように休憩所を設け、お茶を飲みながら展示物やパンフレットを見たりできるようにした。制作コーナーではレッドリボン作成、メッセージ作成のためのリボンとカードを置いた。DVD「ミズホとサトシ・高校生の作った紙芝居」（神奈川県立高校 2007）は休憩所で上映した。

4. 来場者の反応

来場者は約200名で、秋田市内を中心に県内の幼児、小中高大学生、一般市民が来場した。記帳していただいたデータによると、小中高生が多かった。親子で訪れた方たちや、外で景品引換券をもらって来場した中高生などが見られた。展示ポスターを見ながら、クイズラリーをしながら、スタッフに質問してくる熱心な親子もいた。学校で学習した内容を教えてくれる中学生も見られた。休憩所でお茶を飲んで談笑したり、レッドリボンを作ったり、和やかに過ごしている来場者が目立った。

また表2は、来場者のアンケートの回答内容である。「HIVに関する知識の獲得」「HIV検査の大切さ」「クイズが良い」「親子で考える良い機会」「性がからむと取り扱いが難しい」などの感想を得た。

5. 講師によるコメント

トークショーの講師から、今回のイベントについて得たコメントは次のとおりである。

表2 来場者アンケートの回答から

- ・ HIVについてもっとみんなに教えてあげるとよい。
- ・ 親子で考える良い機会。
- ・ クイズ形式が頭に入りやすく良かった。楽しかった。
- ・ 改めて命の大切さを学んだ。
- ・ HIVは重要な問題だが、性がからんでくるのでなかなか、検査の普及率も低いのだろう。このようなイベントがあるのは良いと思う。見やすいブースでよかった。
- ・ もし、かんせんした人がいても、さべつしないでいきたいとおもった。
- ・ 若い人たちがエイズにならないように幼児や小学校低学年から、国の単位で教えていくべきだと思います。
- ・ こんなものなんだなとおもいました。
- ・ とても勉強になりました。
- ・ なるほど。今後もこういう企画をしてほしいと思う。
- ・ HIVは人にうつるかのうせいがあるのでびっくりしました。
- ・ 検査の大切さがわかりました。



図2 イベントスタッフ、講師、来場者

- ・ 中核拠点病院医師：「(イベントは)初めてであり、また開催中に学祭の目玉となるようなイベントとぶつかっていたようで、参加者は多くはなかったが、それでもトークショーはうまく進行したと思う。配布物がけっこう人気があったように思う(コンドーム)。学生、院生がいかに来場した方々に話しかけるかが、会場に残って、トークショーにも残ってくれるか、発言してくれるかにつながると思う。「サクラ」が必要な気もする。(アジテーターみたいな存在が良いです)」
- ・ 保健師：「学生さんが企画するHIV予防イベントを初めて拝見した。イメージしていたより、実際は

大変盛況だったと思う。クイズやレッドリボン作成など、一般の来場者が入りやすく、自然にHIVについて学べるよう工夫されていた。来場者からのコメントを書いてもらうコーナーを見たときに、『一般の方も、こんなにHIVについて想っているんだな』と感激した。トークショーでは来場者がちょっと少なかったのが残念だったが、あちこちのPR(チラシなど)で、本当に聞きたい方は来て下さったと思うし、しっかり伝わったと思う。またこのような企画を楽しみにしている。」

図2は講師・スタッフ・来場者である。

6. 事後処理・ふりかえり

1) 事後処理：決算書、報告書、協力団体へのお礼の手紙を作成し発送した。経費については指導教員が負担を考えていたが、結果として中核拠点医師の尽力により東北HIVネットワーク事業^(注2)からの援助を受けることができた。

2) 参加院生によるふりかえりの会：10月21日、印象の薄れないうちに院生が集まって反省会を開き、次年度への提言をまとめた。表3は、その抜粋である。宣伝などの準備、来場者確保の方法、クイズラリー、展示物、トークショーなどのイベント内容、部屋の配置、来場者呼び込みなど様々な側面についての反省、次回への提言が寄せられた。

3) 代表院生2名のふりかえり

企画者であり代表者を務めた院生2名のふりかえりは以下のとおりである。

・ KCさん：「大学院の授業を受けてHIV予防啓発に興味を持ち、これを繰り返し伝える必要があると思った。HIVは他人事のように思われるが、若い立場で、高校生たちに近い目線で伝えることが大事だと思う。院生時代はそのチャンスだ、HIV予防という、ちょっとやりにくそうなことをやるのが必要なことだと思った。

そしてHIV予防イベントを、秋田大学大学院の特色の一つとして盛り上げられたら良いなと思った。大学院入学時のオリエンテーションで主任の先生から、大学の一員としてしっかり努めるようにと話があった。たとえば会社員であれば、自分の会社を盛り上げるとか、特徴付けるということが大切だと思っていた。会社の一員であるなら、そのために何ができるか考えるものだと思う。それと同じように、大学院生なら自分の大学に何ができるかと考え、イベントをやりたいと思った。

表3 ふりかえりの意見

- ・抵抗のある人にも入りやすい空間を。
- ・専門用語を使わない宣伝…より親しみやすいものにするには？
- ・大学祭ではトークショーに人は来ない。
- ・トークショーでスライドのため部屋を暗くしたら、人がサーっといなくなってしまった。
- ・クイズは親用、子ども用どちらもつくる。
- ・来てくれた人にアンケートを
クイズラリーの紙にアンケート用紙をつける。
- ・熱心に見ている人がいてスタッフの事前の知識が必要だった。
- ・休憩所の机でHIVについて語り合う小学生、おばさんがいた。
- ・親子でレッドリボンを作るのがいい。
- ・レッドリボンの意味が伝わりづらい：レッドリボンを作る意味などの説明を机にも書いておく。
- ・景品引換券は前日も当日も配布するのがよい。
- ・景品の袋（レッドリボンの図柄）が良かった。
- ・雑誌の掲載のアピール
協賛商品が紹介されている雑誌を展示
- ・Tシャツをお揃い（赤）にするなどもっと目立たせる。
- ・外国人の方も来てくれた。英語の訳を付けるとよい。
- ・休日なのに先生方が来てくれた。
- ・内輪だけで盛り上がりすぎて入りにくいということのないように雰囲気作り。

前年のエイズデーにレッドリボンツリーやパンフレットなどを学生ホールに展示した機会があったことも、今回のきっかけになった。

KMさんと話していて、彼女の一言で開始し、アイデアを出し合った。二人でやり始めて、他の院生に迷惑かけたくないと思っていた。しかし、二人だけでは、できなかった。みんなが協力してくれて、お願いできた。お任せするところはお任せした。自分は人に任せるのが苦手だったが、任せるところは任せて良いのだと学習できた。この中のだれ一人欠けてもできなかったことだと思う。

学会時に池袋の「ふぉーてぃー」に寄ったのは、実際に啓発を行っている人の話を聞いたから。説明を聞き、資料をもらい、企業による協賛も教えてもらい、大いに役立った。

ある高校にポスターを配った後、養護教諭から電話があり、「生徒から質問があり『日本では1日に4人感染している』って本当なのですか？」と照会

され回答した。イベントに来てもらわなくても気にとめてもらえただけでも効果は大きかった。院生みんなが学校に出向いてポスターを配ってくれたから、このような反響もあったのだと思った。」

・KMさん：「『あの時HIVについて知っていれば…』という、いつか誰かが経験するかもしれない思いを少しでも減らすために、そして既にその思いと共に生活している人々と生きていくために、大学生、高校生、中学生に対して今私たちができることは何なのか。それを考えるきっかけになったのは、(大学院で学ぶ以前は、私もHIVについて関心がなかったが)授業で見た「カレシの元カノの元カレの元カノの…」(AC広告機構 2005)が印象的で、初めて誰にでも感染の可能性がある怖さを感じたことである。自分にも関心がなかったからこそ、関心がない人々にHIVについての知識を知ってもらいたいと考えた。既に知識をもっている人が、たくさんの知識を関心のない人に向けて発信しても、『何だか難しいことを言ってるし、自分には関係ないし…』と感じるだけ。堅苦しく言われても、たくさん情報を並べられても、興味ないものは興味ないと私も感じる。関心のない人々に必要な情報は限られたものだと思う。ほんの少しでも視界に入れてもらうためには、どんな情報をどう伝えたらよいのか…と考えることは簡単なことではなかったが、常に『何も知らない』『興味ない』という目線で自分も活動することが大切だと考えた。

もう一つ大切にしたことは、既に感染・発症している方が目にした時に、その方々を傷つける内容であってはならないということ。イベントの前に大学生対象の授業で予防に関する〇×クイズを実施した。授業後の感想で、『知らないことがたくさんあった』『楽しく学べた』という中で、『楽しく学べたが、受講生にHIV感染者がいないことを前提としてやっているんですね』という感想があり、ドキッとした。できるだけ難しく伝えないことを意識していたあまり、HIVに感染している方が授業にいた場合の配慮が欠けていたことをとても後悔した。この経験を予防啓発活動では活かし、感染している方と共に生きていくという視点で実施した。

HIV予防啓発という言葉は一言であるが、その一言を口にするためには、HIVについての知識はもちろんのこと、医師の仕事、薬について、保健所の仕事、県の活動、性教育、避妊、妊娠出産、プレゼンテーショ

ンの方法、ポスターのデザイン・配布場所、対象年齢について等、学ぶことはたくさんあった。1人ではなく、たくさんの方々と共に啓発活動をすることで、1のことから1000のことを学べたとても貴重な体験となった。その活動ができるだけたくさんの方の目に止まれば、それにこしたことはないが、1人でも2人でもHIVについて知っていただければと思う。」

V 考察

1. 全体の活動について

初めての試みとしてはスムーズな進行であったと考えられる。院生と指導教員との二人三脚が進めたが、院生たちが、授業や、HIVカウンセリング研修会で勉強し、筆者のHIVカウンセリングに関する活動をよく理解していたこともその大きな要因であったであろう。

大学祭自体が大盛況というほどの規模ではないこと、またイベント会場が大学祭メイン会場から少し離れていたこともあり、来場者が自然に足を運んでくれる場所ではなかった。そのため、おみやげが付きますという働きかけは必要であったと考えられた。

トークショーへの来場者が20名弱と少なかったのは、残念であったが、お楽しみ型大学祭の特徴を考えると、一般来場者の期待とはズレがあったとも言えよう。秋田県の第一線の専門家によるトークは秋田県のHIVに関する現状やHIV抗体検査の受け方、HIV陽性者の心理など多岐にわたり、内容が高度でありながらわかりやすかったので、多くの人々に聞いてもらえたかった。講師のコメントにあるように、来場者への積極的な働きかけによって聴衆が増えたかもしれない。今後の課題であろう。

また、本イベントを聞きつけて他大学の方や性的マイノリティ当事者の方も訪れてくださった。その意味では対外的な刺激にもなったと考えられる。

2. 創意工夫すること：資源の探索・開発

展示を充実させるために自分たちの守備範囲だけでなく、外部機関を探しアプローチすることも試みた。このイベントに必要なものはどこにあるのか、調査探索することも必要であった。保健所や他学部HIVのパネルや道具を借用しに行くこと、また展示ポスターを貼るためのパネルを大学事務局に借りることなど、院生たちが様々な人や機関、ネットなどのメディアを介して情報を収集し、周りの資

源を探索し、開発していった。適切なパンフレットを得るために企業、行政、エイズ予防財団等、にも提供をお願いした。さらに、既存の資源だけでは足りない部分については、企画者自身でもPR用ポスター、展示用パネルを作成した。PR用ポスターはHIV予防の理念を適切に表し、かつ若者や一般の人の関心を引くように、しかも抵抗感をもたれないように工夫して院生が作成したが、この意図は周囲の反応から見てもかなり成功したといえよう。

会場展示についても、会場の立地、来場者の流れなどを考慮し、工夫が重ねられた。

3. 啓発すること、伝えること

臨床心理を専門とする者は相手の話を聞くことは得意であるが、他者へのPRは苦手な分野といえるかもしれない。しかし啓発をするからにはこちらのメッセージを相手にしっかり伝えなくてはならない。どうしたらこちらの意図を正しく受け止めてもらえるかを、じっくり検討し工夫する必要がある。院生は、実際の来場者の反応を生で体験することによって、その理解ができたであろう。

啓発は押し付けではなく、来場者が楽しく自発的に学べるようなものであることが肝要である。この点は、臨床心理学的地域活動であるので特に重要である。しかし、ぜひ理解して欲しいという目的で啓発を行っているので、企画者側のこの意図が十分に伝わるように、来場者の目線を考えた働きかけが必要であろう。

来場者の立場に立って、展示、トークショー、クイズラリーなどの会場の設営を考えた。来場者が入りやすく、リラックスして見て過ごすことのできるような雰囲気作りが必要であるが、これは日常の心理臨床業務での留意点と同様である。来場者が居心地良く過ごせ、自分は歓迎されていると感じられるような場の設営を考えた。ただし、イベントの場合は単に居心地が良いというだけではなく、外からやってきて「何か面白そう、見てみよう」と思わせる魅力、人の心をつかむような要素も必要である。

院生KMのふりかえりにあるように「関心のない人々に、どんな情報をどう伝えたらよいのか、と考えることは簡単なことではなかった」が、関心のない人がイベントに来て良かった、知識が増えて良かった、と思えるような内容であることが必要である。来場者の期待に応えようとする努力は不可欠である。

また、院生KCの振り返りにあるように、ポスターを見た人からの反応（問い合わせ）があったことは、来場しなかった人に対しても啓発していたといえる。ポスター1枚から多くの人に何らかのアピールができるのである。そう考えればポスター、チラシ1枚についての責任も大きいといえよう。

4. 協働すること、感謝すること

資源探索、準備、当日の運営に関して、さまざまな場面で多くの人々との協働が必要となった。協働するためにはこちらの意図をはっきり伝えて相手に理解してもらい、同時に相手の役割や守備範囲を知ることが不可欠である。

まずは同じ院生同士の協働があった。展示パネル作成、案内ポスター作成、学校への訪問PR等さまざまな作業をこなすには各自の特技を活かして、分担するという協働があった。院生KCの振り返りにあるように、任せるところはきっちり任せることの重要性を学んだ事も大きい。他の人をお願いし任せることは相手を信頼することであり、任された者はその信頼に応じてその責任を果たそうという意欲が湧くものである。協働とは共通の目標に向かって、役割分担をしながらうまく補完しあい協力して作業していくことである。そこには対等の関係があり、お互いを尊重する態度があるはずである。そこからスムーズなコミュニケーションと節度のある親しさが生まれてくるであろう。

今回は専門家との協働もあったが、院生の立場から専門家に対しては、協力をお願いするという謙虚な態度がまず大切であろう。協働は対等の立場で共に働くことではあるが、その道の専門家に対しては礼節をわきまえ、尊敬の念を示すことは重要である。今回トークショーの講師はすべてボランティアで出演してくださった。HIV予防啓発という目的のために時間とエネルギーを無償で提供してくださったことへの感謝を表すことは自然な気持の発露として欠かすことはできないであろう。

またポスターを貼ってくださったり、関係者に取次いでくださった方たち、資材や情報を提供してくださった方、様々な形で協力してくださった方たちとの協働があったからこそイベントが実現したわけである。

5. 楽しく活動すること：トレーニングとしての意義

活動をするときに「楽しい」ということはエネル

ギー源となる重要な要素である。院生たちも新しいものを作り出すこと、人に働かせること、ともに動くことの楽しさを感じていたことが見て取れた。楽しいからこそ、普段行った事のない活動を自発的に、そして工夫を凝らして行うことができたのであろう。自由に創造すること、想像することも楽しさの中から生まれてくることである。院生たちが生き生きとした表情でキビキビと動いていたのが印象的であった。指示されて行なうのではなく、自発的に動くことの楽しさ、自分らしさを発揮できる面白さを十分体験していたように思われた。

対等の立場での協働であればお互いの理解が深まり、役割分担も進み、各自の持ち味が活かされることになり、より楽しい活動につながるであろう。

6. 現実的作業の重要性

イベントを行なうにあたっては、様々な現実的作業を伴う。予算やお金のやりとり、場所確保、人との交渉等々である。大学院でのこのような現実的作業は臨床心理相談室で若干あるくらいで、それ以外ではあまり多くない。学部時代のサークル等での大学祭参加はあったかもしれないが、地域心理臨床として予防啓発イベントを行ない、それに伴っての現実的作業を行なうことは初めてだったであろう。HIVケア・予防啓発の目的を効果的に達成するために、様々な現実的な工夫を行った。予算を押さえ、使える社会資源を探して出かけて直接交渉し、身体を動かしてポスターやパネルを作って展示した。このような実体験は大きな体験としてこころに残るであろう。クライアントのこころの深い部分にまで入る心理臨床の場は言ってみれば非現実的な空間である。そこにかかなりのエネルギーを割き始めた院生にとって、現実面への関心もきちんと保ち、対応できることは将来社会人としてバランスよく活動する上でも大切なことである。

7. 院生代表者・指導者の役割

1) 代表院生2名の役割: この2名はリーダーシップをとって活動を進めていった。また各院生も役割を得て協力していた。他の院生、教員を巻き込みながら、関心を集めていった。日頃のチームワークのよさが今回も現れていたが、このイベントを通してさらに凝集性が高まったようであった。院生のふりかえりにあるように「二人だけではできなかった。誰が欠けてもできなかった。みんながいたからできた。」ということばに集約されるような、協働がで

きていた。

2) 指導教員の役割: 院生による自発的な企画・運営を尊重したいと考えた。指導者はそばにいて時にアドバイスや激励をすることが重要であると考えられた。今回は初めての試みであり、院生のイメージもつきにくかったのではないかと考え、教員はある程度はリードした面もある。財源、他機関、講師との交渉は担当した。

さらに、心理学研究室等の各教員の理解・協力・暖かな見守りが寄せられたことも大きなエンパーとなった。

8. イベントの成果: ふりかえり・評価から

言うまでもないが、何らかの事業を行なったときにはやりっ放しではなく、自分たちの行なったことをふりかえり、他者からの評価を得てさらに向上を目指すことが必要である。このようなイベントの成果・効果がどの程度あったのかを測定することは容易なことではない。何が客観的な指標になるのかということについても議論のあるところであろうが、現時点で考えられる範囲で、イベントそのものの成果と、院生のトレーニングとしての成果について考えてみたい。

1) イベントとしての成果: 大雑把な目安としては①来場者数、来場者の反応(会場での反応やアンケート)、②外部の評価、③企画者・スタッフによる自己評価、④その後のネットワークの拡大の有無などがある。

①の来場者数については200名前後とほぼ目標は達成できたと言えよう。また来場者の反応については楽しんで学んでいる様子が見られ、スタッフに熱心に質問する様子もあり、良好であったといえよう。来場者からのアンケートはおおむね好評であった。好意的に見てくれた人がアンケートにも記入してくれたのであろうから、通り過ぎていった人からも感想が得られたら、さらに客観的な評価が得られ、改善点も明確になったであろう。ただ啓発の核心であるトークショー来場者は20名と少なかった。改善の余地がある。

②外部からの評価については、今回はきちんとした評価を受けていないが、他大学の方や性的マイノリティの方が見学に訪れて好意的な評価を伝えてくださった。また資金に関して、東北HIVネットワークの資金を提供していただけたことも本イベントが公にも認められ、外部評価で意義があるという証に

なつたと考えられよう。またチラシ・ポスターを配布しただけでも質問が寄せられたことから、HIVについての啓発が広く行えたといえよう。

③企画者・スタッフの自己評価は院生のふりかえりにあるように、来場者の熱心な態度に感心したり、レッドリボン作成が良かったなどの良い点と、さらに改善するための具体的な提言が出されるなど、イベントを客観的にとらえた上で、高く評価していた。

④ネットワーク拡大については、近隣大学のスタッフが見学に訪れてくれ、今後の企画の共有などその場で話し合いができ、ネットワークが広がったといえよう。

2) 臨床心理学的地域活動トレーニングとしての成果: この点については代表院生2名のふりかえり、また本考察の2-7にあるように、大いに成果があったと考えられる。院生らのふりかえりには積極的な姿勢、具体的な提言が多く見られ、院生たちがこのイベントに深くコミットしていたことが明らかであった。HIVについての理解の深化、イベント開催にまつわる様々な作業(広報、資料開発、他団体への交渉等)についての創意工夫、専門家との出会いと協働、仲間との連携等々の体験は大きな成長の糧となった。そこから自分たちの資質向上、達成感、自信にもつながったと考える。

9. 今後の課題

1) 内容: 小学生とその親という親子連れがかなり多かったので、低学年向けの内容を充実させる必要がある。トークショーをどのようにアピールするかが課題である。このような「硬い」演目については別の機会を設けて行った方が良いという院生の意見が多く出されていることも考慮する必要がある。

2) 継続性: 啓発メッセージを地域に浸透させるには、継続して行うことが重要になる。ところが、大学では学生・院生は入れ替わる。イベントをいかに次の学生・院生に引き継いでもらうかが継続性の鍵になる。引き継ぐ院生たちが、臨床心理学的地域活動としての啓発イベントの意義をしっかりと認識し、それを体で感じるものがなければ継続はしないであろう。先輩のスタイルから学びながらも自分たちらしさ、独自性を出すことで、面白さが出てくるはずである。学生は入れ替わっても、指導者が継続して存在することが必要になる。

継続性が出ることでネットワークの広がりが期待

できよう。秋田大学ではHIV予防イベントを行っているという評判が伝われば、関心のある人が訪れて、イベントのメッセージを持ち帰って広めてくれるであろう。

3) 協働：協働のネットワークの維持を図っていくことが、HIVカウンセリングを運用する際にも大いに役立つと考えられる。関係者がつながっていることのメリットが今回示されたと考えられる。今回、協力してくださった中核拠点病院医師、秋田県担当者と筆者は日頃からHIVカウンセリング事業、エイズ対策事業において協働しており、その連携の中から本イベントへの協力が得られたのである。今後もイベントを含め、様々な機会を通して、多くの人々を巻き込んで連携の輪を維持していきたい。それがHIV陽性者へのケアとHIV予防を強化していくことにつながっていくであろう。

注1：東京都の若者向けHIV予防啓発拠点「HIV/AIDS情報ラウンジふぉー・ていー」は豊島区池袋保健所に設置されている若者向けのドロップイン型の啓発スペースである。HIV予防啓発専門のスタッフが常駐している。

注2：国立病院機構仙台医療センターはエイズ診療の東北ブロック拠点病院で、東北HIVネットワークを主催している。

謝辞：中核拠点病院医師高橋義博先生、秋田県エイズ担当滝本法明氏、横手保健所熊沢まみ氏に心より感謝いたします。またイベントに足を運んでくだ

さった来場者の皆様のおかげでイベントは成立したわけで、心より感謝したいと思います。そして頑張った大学院生全員、特に代表として頑張った菊池麻里さんと菊谷千映子さん、ご協力くださった発達科学選修の先生方へ感謝いたします。

協力団体：秋田県健康福祉部健康推進課、秋田中央保健所、秋田大学医学部保健学科、(財)エイズ予防財団、独立行政法人国立病院機構仙台医療センター、大館市立総合病院、(株)イオンフォレストThe Body Shop、(株)グラクソ・スミスクライン、(株)ジェクス、日本コンドーム工業会、東京都HIV/AIDS情報ラウンジふぉー・ていー

文献

- AC広告機構 2005 「見えない連鎖」ポスター
神奈川県立高等学校生・エイズ教育実践研究会2007
「ミズホとサトシ」2007 高校生が作ったエイズ教育ビデオ教材
高田知恵子 2006 「子どもたち・若者たちの豊かな性と生を育むために—HIV・エイズの状況と教育現場の現状から考える—」、『創造学園大学紀要第2号(2005年度)』, 121-133
第20回日本エイズ学会学術集会ユースプログラム実行委員会 ピアエデュケーション部 2007
「Peer education HANDBAG」
矢永ら 2009 「カウンセリング活用の手引き」エイズ予防財団パンフレット